

研究成果情報	農 産	8	稲	土壌肥料
新技術・情報名	ヒノヒカリの望ましい窒素吸収パターン		分 類	②

1. 成果の内容

1) 技術、情報の内容及び特徴

ヒノヒカリの㎡当たり目標穂数380～400本、目標粗数30,000～32,000粒、10a当たり収量580～600kgを確保するための望ましい窒素吸収パターンを明らかにした。

- (1) 幼穂形成期の窒素吸収量と㎡当たり穂数との関係は2次回帰曲線で表され、目標の穂数を確保するためには幼穂形成期までに10a当たり6.5～7.5kgの窒素吸収が必要である。
- (2) 穂揃期の窒素吸収量と㎡当たり粗数との関係は1次回帰直線で表され、粗数は窒素吸収量に応じて直線的に増加する。目標の粗数を確保するためには穂揃期までに10～11kgの窒素吸収が必要である。
- (3) 成熟期窒素吸収量と精玄米重との関係は2次回帰曲線で表され、窒素吸収量が10a当たり12kgまでは増加傾向にある。しかし、窒素吸収量が10a当たり12kg以上になると精玄米重は横ばいか、やや減少傾向になり、このレベル以上に窒素吸収させても収量増加は期待できない。

望ましい窒素吸収量 (N kg/10a)

【幼穂形成期】	【穂揃期】	【成熟期】
7	10.5	12

2) 技術、情報の適用効果

望ましい窒素吸収量の指標値から地力窒素供給量を控除することにより、施肥の適量が合理的に求められる。これら水稲の窒素吸収パターンや水田の地力窒素供給量等の情報から、施肥診断プログラムの作成に当たると。

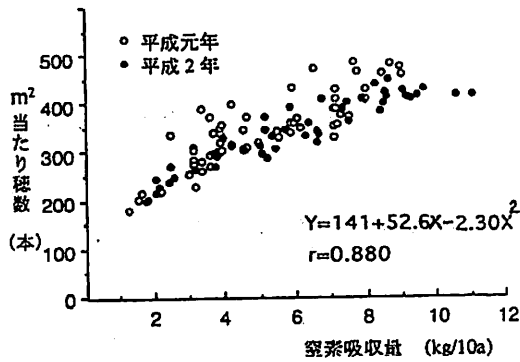
3) 適用範囲

ヒノヒカリの栽培地帯

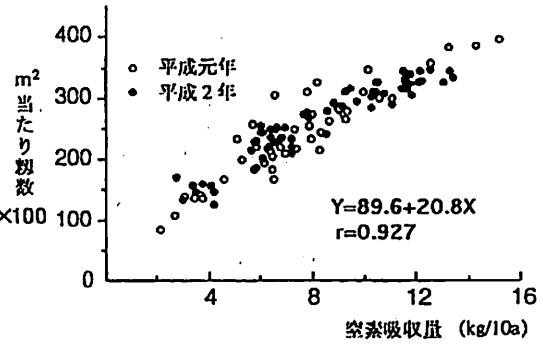
4) 成果の利活用・普及指導上の留意点

極端な粗植栽培や移植時期が大幅に違う場合は適用できない。

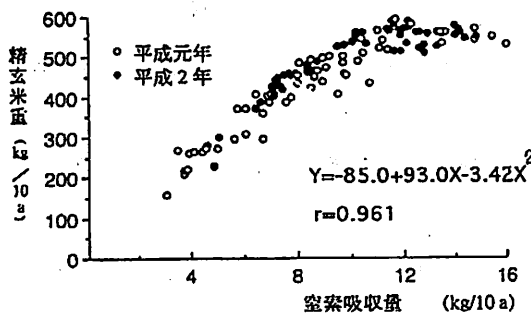
2. 具体的データ



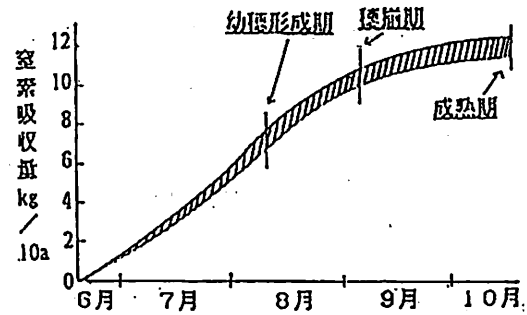
第1図 幼穂形成期の稲体窒素吸収量と穂数



第2図 穂揃期の稲体窒素吸収量と穂数



第3図 成熟期の稲体窒素吸収量と収量



第4図 ヒノヒカリの望ましい窒素吸収パターン

3. その他特記事項

担当部科室名：生産環境研究所 化学部 作物栄養研究室

研究担当者名：角重和浩 山本富三 井上恵子 末信真二

研究課題名：品質向上のための水稲施肥技術

期 間：平成元年～平成3年

予算区分：経常

既発表論文・資料名等：平成元年、2年度 福岡県農業総合試験場 生産環境研究所 化学部 春夏作試験成績書

取りまとめ責任者名：角重和浩